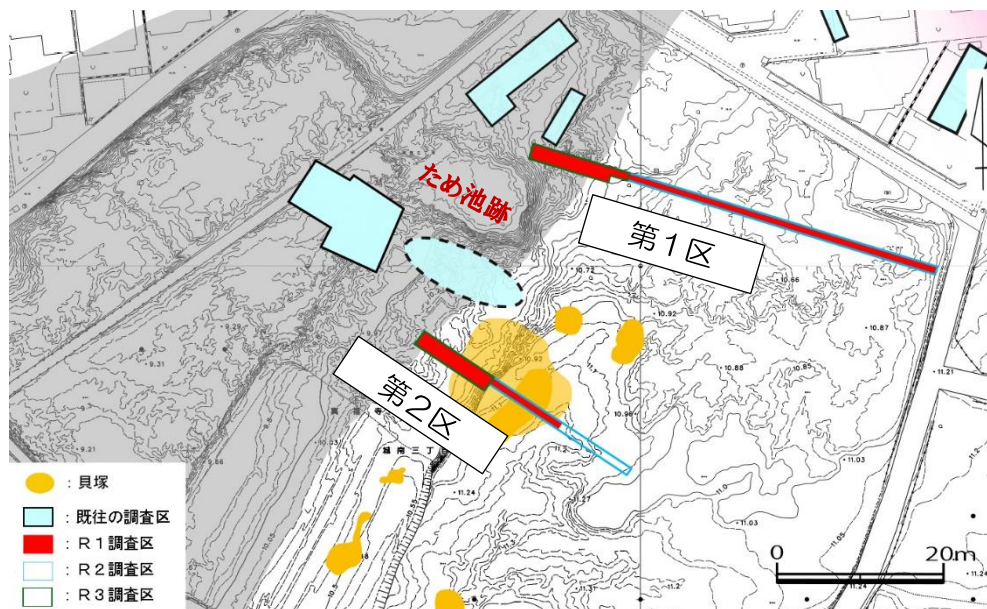


令和3年（2021）

■ 9月17日（金）

発掘現場を吹き抜ける風にキンモクセイの香りを感じるようになりました。

控えめに様子をつかっていた秋が、自信たっぷりに近づく足音を感じます。



### ① 第1区（北側の調査区）の調査

調査区西側のローム質の黄褐色土層中に介在する暗褐色土層（1b層）の掘り下げを継



写真1 調査のようす

令和3年（2021）

続いています。

現在、調査区西端で、地表下 190 cmまで掘り下げを行っています（写真1）。出土遺物は、引き続き、晩期前葉安行 3b 式を主体としています（写真2）。

さらにこの層の下には、炭化物と遺物を多量に含む黒色土が堆積しています（写真3）。時期は引き続き、晩期前葉安行 3b 式を主体としており、大型の製塩土器の口縁部も出土しています（写真4）。

製塩土器は、その名のとおり、塩を作るための土器です。薄手、外側・内側ともに火を受けて明るい色調、外面はヘラのようなもので削って仕上げ、器表面は剥落している場合もある、などの特徴があります。今回より前の



写真2 遺物出土状態 ※右下の円筒状のものは排水用のポンプ



写真3 炭化物と遺物を多量に含む黒色土層

令和3年（2021）

調査でも出土しており、また「令和3年7月の調査・その2 7月15日」でも紹介したように、今回の調査でも出土していますが、それらとくらべても良好な保存状態です。付



写真4 製塩土器

令和3年（2021）

着物などをくわしく調べることで、真福寺縄文ムラにおける塩づくりや資源利用の実像解明が期待されます。

なお、黄褐色土層を掘り下げていくと、西端でみつかった近世の遺構がなお下へと続いていました。上位のところ同様に、外周の樹皮材を取り上げたところ、直径2～3cmの小杭列が列状に並んでいました（写真5・6）。

さらにその小杭列を取りはずすと、東側に斜めに打ち込まれた材が数本ありました（写真7）。これらは枝状のもので、加工痕跡もなく、曲がったものや二股に分かれるものも見られます。



写真5 近世の遺構 樹皮材と杭で土留め



写真6 樹皮材を取り外したようす



写真7 杭列の背面に打ち込まれた枝状の材